

# 「環境共同体としての日中韓」

寺西 俊一監修、東アジア環境情報発信所編

環境共同体としての  
日中韓

寺西俊一監修 寺西俊一監修  
東アジア環境情報発信所編



「数学は嘘をつかない」とは逮捕された某IT社長の言葉だが、こと環境問題にもこれはあてはまる。それがまず本書を一読しての感想だ。次に世界の未来は、良かれ悪しかれ中国が鍵を握っていること。さらにその中国の方向性に、今後、韓国と日本が大きな影響を与える可能性があるということだ。

新書とは思えぬ重厚な質を支えるのは、二十三名の執筆陣と監修者を含め六名の編集者の専門性の高さによる。今、中国を始め、東アジア各地に刻々と進行しつつある環境破壊へ警鐘を鳴らさんとする気概が迫る。

中国から韓国や日本へ、酸性雨、黄砂、高濃度の農薬のついた毒菜(ドシチョイ)が押し寄せる一方、日本からは鉄、銅のスクラップを始め家電製品やパソコンの廃棄物、さらに企業による公害が輸出され、韓国からは日本へ、海を渡り大量のゴミが漂着してくる。それはもはや「日中韓」が、衣食住の表から

## 東アジアは「世界の縮図」

裏まで運命共同体であることを物語っている。

日本の過去を、まるで写し絵のように見事に後追いする中国と韓国。急激な経済発展のもたらし利便性だけでなく、公害と環境破壊という負の側面まで踏襲し、現在も、因果は入り乱れ、三国関係は歪に絡まりつつある。その対策として求められるのが、「国境」を超えた情報提供と草の根での取り組みだ。

例えば、日本と比べ公害対策が立ち遅れているかに見える中国、韓国では市民が共同で出資し建設する太陽光発電や家畜の糞を使うバイオガス設置が、むしろ急速に広がっている。エネルギーを政府や電力会社の専門分野とせず、地域で造り出そうという意識は、日本も見習うべきだ。さらに中国では今後、都市と農村の経済格差が拡大し、貧しい地域は原発や産廃施設を押しつけられざるをえない現状が生まれるのは必至だ。その構造を打ち破るヒントも今年、水俣病「公式確認」から五十年を迎える日本が握っている。

足元をもう一度確認しつつ、教訓をどう生かすのか。東アジアが、まるで世界の縮図として見えてくる一冊である。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)

▲集英社新書・735円